

# 黒田大明神原B遺跡の発掘成果

(令和4年度調査)

黒田大明神原B遺跡は、飯田市内に500か所以上ある遺跡のうちのひとつです。今回、道路建設や民間事業が計画されたため、遺跡の情報を記録として残すため、事業者様のご協力のうえ、飯田市教育委員会が発掘調査を実施しました。

## 令和3～4年度調査でわかったこと

### 【縄文時代】

竪穴住居7棟を検出しました。うち3棟は縄文時代早期(約10000年前)、4棟は縄文時代中期(約4000～6000年前)です。住居はいずれも調査区の西～南寄りに分布しており、丘の上の中心ではなく、日当たりのよく水の手に近い斜面地を選んでいます。

ほかにも、住居の周辺には多数の土坑(穴)が掘られていました。貯蔵穴(ちょぞうけつ)や集石(しゅうせき)のほか、一部の穴からは装飾豊かな土器が多数出土しました。土器の年代は、前期(約8000年前)～中期後葉(約5000年前)とかなり幅があり、縄文人があらゆる時期にこの地を好んで利用したことがよく分かります。

特筆される遺物として、ネフライトと呼ばれるヒスイに似た風合いの石でつくられたペンダントがあります。また、黒曜石やチャートの石材が一括出土した穴があります。

### 【弥生時代】

竪穴住居8棟を検出しました。弥生中期末という珍しい時期の住居が1棟、他は弥生後期(約2000年前)ですが、それぞれ若干の時期差がみられます。また、住居の周辺には柱穴の跡が分布しており、確実に建物を把握できませんでしたが、倉庫などが想定されます。

注目すべきものとして、柱とみられる穴の跡からイネ、豆、クリなどが出土しました。これらは当時の農耕の実態や食文化を考えるうえでキーになる可能性があります。

### 【まとめ】

過去の調査とあわせると、遺跡の中心がある丘はほぼ全体が記録されました。特に今回の3500㎡をこえる広大な調査によって、縄文と弥生の「村」の姿が詳細にとらえられたことは、それぞれの時代の土地利用や精神文化を考察するうえで大きな成果です。開発により遺構はなくなってしまいますが、その代わりとして報告書の刊行作業を来年度中におこなうほか、展示等で市民の皆様によくお知らせする予定です。

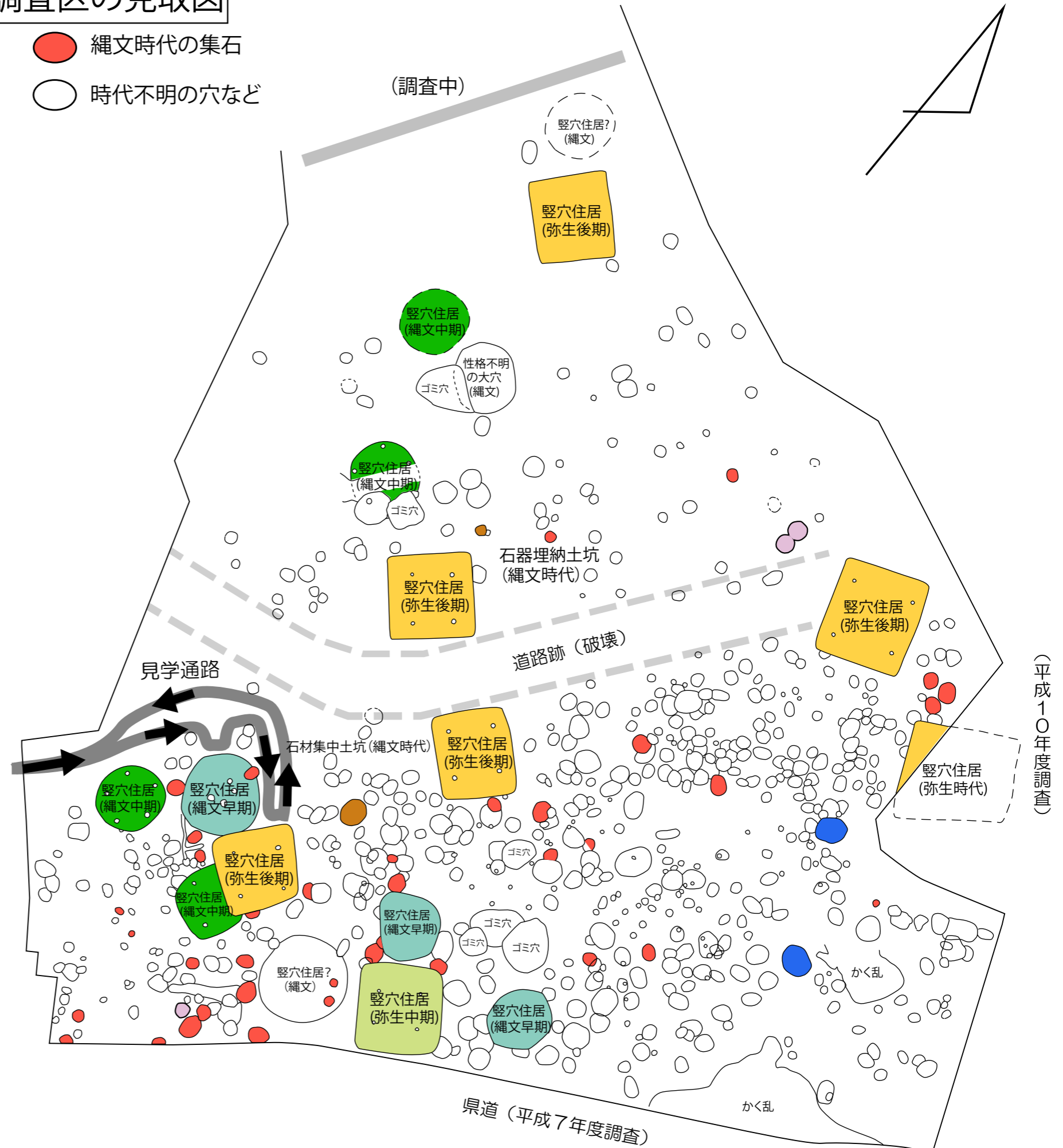


出土した時の状態

調査で出土した縄文土器のうち、一番大きいものです。1つの土器を分割して、折り重ねるようにして埋められていました。縄文中期初頭に関東で流行した「五領ヶ台式土器」に似ています。

## 調査区の見取図

- 縄文時代の集石
- 時代不明の穴など

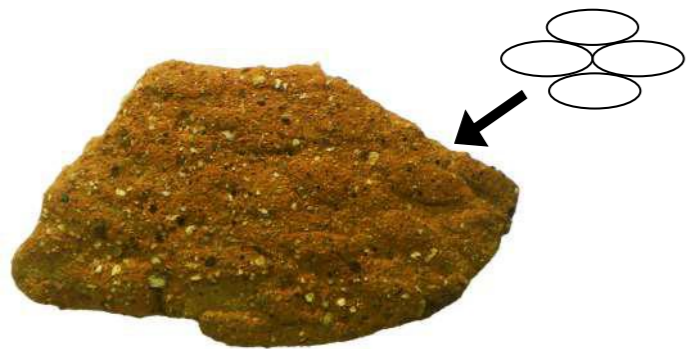


(平成10年度調査)

# ① たてあなじゅうきょ とても古い竪穴住居

【時期】 縄文時代早期（約10000年前）  
【出土品】 土器（押型文土器）、矢じりなど  
【大きさ】 直径約5m  
【特徴】

縄文時代は1万5千年以上も続いた長い時代ですが、この住居跡は今から1万年ほど前の縄文時代「早期」（そうき）の古い家です。この時代の家は発見例自体が少なく、とても貴重な成果となりました。飯田市内では、座光寺の美女遺跡などで数例が確認されているにとどまり、全国でもそう多くはありません。早期には、「押型文（おしがたもん）土器」という、スタンプで文様をつけた特徴的な土器が作られ、この家でも破片が出土しています。



出土した「楕円文」の押型文土器

# ② たてあなじゅうきょ 教科書のような竪穴住居

【時期】 縄文時代中期（約5000年前）  
【出土品】 縄文土器、石器など  
【大きさ】 直径約4m  
【特徴】

非常に良い状態で残っていた住居跡です。柱穴は壁際にほど等間隔で5基あります。中央奥に石を四角く囲った「炉」があります。よく見ると、1方の石のみ外されています。住人が引っ越す際に、何らかの意味を込めて壊されたのでしょう。



# ③ たてあなじゅうきょ 弥生人に壊された縄文時代の竪穴住居

【時期】 縄文時代中期（約5000年前）  
【出土品】 縄文土器、石器など  
【大きさ】 直径約4m  
【特徴】

北半分ほどを弥生時代の家に切られています。この家の炉は②と同じ掘りごたつのようなタイプで、ほぼもとのかたちのまま残っています。



# ④ 石器が埋められた穴

【時期】 縄文時代  
【出土品】 打製石器1点、磨製石器3点  
【特徴】

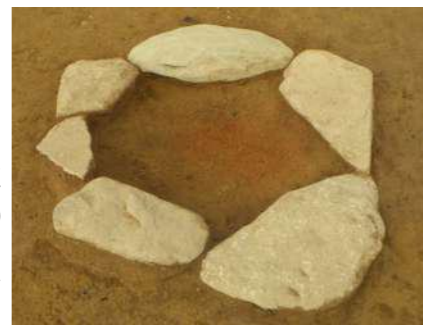
小さい穴に石器が4点埋められていました。1点は土堀り具の打製石器、3点は石を磨いて作った磨製石器でしたが、磨製石器は意図的に割られていました。石器を用いて何らかの儀式をおこなったとみられます。



# ⑤⑥ たてあなじゅうきょ かろうじて炉が残った竪穴住居

【時期】 縄文時代中期  
【出土品】 土器など（わずか）  
【特徴】

2軒とも縄文時代の住居跡ですが、⑤は果樹園の耕作による破壊、⑥は表土の流出によってほとんどが失われていました。しかし、中央奥寄りにある石囲炉は両方ともよく残っていました。同じ縄文の家（②・③）の炉とつくりの違いを見てください。



竪穴住居⑥の炉

# ⑨ 大昔の冷蔵庫「貯蔵穴」

【時期】 縄文時代中期  
【出土品】 土器など（わずか）  
【特徴】

地上部分の口が狭く、底の方が横に広がることから、食料などを貯蔵した「貯蔵穴」と考えられます。人が入る大きさです。



# ⑦⑧ たてあなじゅうきょ 焼けた竪穴住居

【時期】 弥生時代後期（約2000年前）  
【出土品】 土器など（わずか）  
【大きさ】 ⑦：一辺約5m  
⑧：一辺約6m  
【特徴】

2軒とも床が赤く焼け、炭化した木材が多量に残っていました。焼けた弥生時代の家が発見されることは比較的多く、引っ越す時に家を燃やす風習があったようですが、⑦は土器などの遺物が多く残っていたため、火事があった可能性も考えられます。炭化物は屋根や柱の材料とみられ、主柱も残っていました。



# ⑩ か 狩りに使われた落とし穴

【時期】 縄文時代  
【出土品】 土器のかけらなど（ごくわずか）  
【特徴】

縄文時代の追い込み猟に使われた大きな落とし穴で、今回は2つ見つかりました。飯田市内ではこれまでに川路や松尾などの遺跡で発見例がわずかにあるのみです。底には落とした動物の動きを封じるために打ち込んだ「逆茂木（さかもぎ）」の跡があります。出土遺物が少なく、時期を細かく特定することはできませんでした。



底の3つの穴が「逆茂木」の痕跡

# 珍品！縄文のペンダント



ヒスイに似た石で作られています。穴にひもを通して身につけたもので、限られた人だけが持てた貴重品です。

# 弥生人の食べ物？



小さい穴（柱穴か）から弥生土器といっしょにイネ、豆、クリ？などの炭化物が出土しました。今後、精密な分析をおこなえば、当時の食文化や農耕の実態に迫ることができるかもしれません。